

2. 三六年六月の水害を体験して

飯田長姫高校一年 M・S

昨年の集中豪雨から早や一年が経とうとしている。今年もまた梅雨を迎え、今になっても移転できず、少しの雨にも油断できなくなっている人々も相当にある。百ミリ近く降れば安心していられないというのが、現状である。昨年の水害を今一度ふりかえってみよう。あの時のことを思い出したくはない。なぜならあの時の恐ろしかったことを思い出さねばならないからだ。今思い出してもゾツとする思いだ。前後の日々の関係などは夢中で良く覚えていないが、当時の記録など見て考えていこう。

中学の三年になったばかりで、待望の修学旅行もすんで、生徒会活動も順調にすべり出していたその六月二十七日、三日ばかり前から降り続く雨は、天竜川の水を濁らせ、水かさを増していた。その日は午前中授業で、午後は視教の映画会の予定で、変りなく映画が始まったが、間もなく中止となり、一階の教材を二階に運び、午後二時全員下校。その時既に水は校庭の下までできていた。いつも一年に二度くらいはこのようなことはあったが、これも下流の泰阜ダムができてからだ。だが今度は水の増し方がいつもと違う。長年の経験により、おとなの人達あるいは子供達までが、いつもと違う天竜川の水の様子がわかったらしかった。

学校から二分足らずの僕の家は、天竜川の水による浸水は一度も受けていない。しかし増水してきた場合や夜の停電のことなども考えて、電池、ローソク、ラジオや食糧など一応確保した。

六時過ぎの雨の降り方は一段と強く、天の湖の底が抜けたと思うほどに……。天竜川の水は急激に増し、僕の家も危険な状態になりつつあった。

それからというものの、少しの休む暇もなく、夢中で、あたりにあるものは何から何まで、必要なものはしから二階へ上げた。階段の上り下りだけで体はビショぬれで、足がガクガクしてきた。すでに水は一階の腰丈位、近くの小父さんが応援に来てくれて最後のものをあげた。水と競争であるが、はるかに自然の力の方が早い。母や姉は既に安全地帯へ避難していた。

時間は九時頃だったろうか。危険を感じて最後に仏壇をまとめ、板の上に乗せて水の上を浮かせてきて、二階へ上げておいて逃げた。首まで水につかり、寒さと恐ろしさにふるえながら……。

後から、
「よくあれだけの物が少しの時間に上がった。」
と父、母はうれしさに涙をためていた。

あの時の増水の仕方は、三十分に四、五十センチは軽くオーバーしていただろう。

その晩は小父さんのところで一夜をあかしたが、恐ろしさと川の音で一睡もできなかつた。もう一人の兄は農協へ勤務していて帰らず、一時過ぎに避難しているところへ尋ねてきて皆ホツとした。

長い一晩が明けると、川路の半分は完全に泥沼と化していた。人々の表情はなんとも言えず、ただ自然の力の偉大さに呆然としていた。

その後しばらくして学校へ行くと、予定表を書いた黒板が半分泥水で消され、雨にぬれているのが非常に印象的であった。それは一週間後ぐらいだったと思う。

悲壮な思い出ばかりだが、一つ嬉しい思い出がある。一瞬のうちにして衣食住の全部をなくしてしまった僕達、泥水の中から立ち直ったのである。そんな時嬉しかったのは、全国からの慰問文、他地区からの復旧作業の手伝いでした。

学校も幾度か水害に合いつつ、今度のような水害は床上六メートル、一メートル余りの泥に埋もれ、惨害を残して去ってしまった。他地区の消防団、PTA、自衛隊、高校生の復旧作業にもかかわらず、中学校は竜丘小の一隅へ移転と決定し、住み慣れた校舎の一部一部にも数々の思い出を残し……。

十余日ストップした学習を、慣れない環境の中でやらねばならない。教科書、教室も不十分な状態の中で、授業再開に至ったのである。

あの水害にも負けなかった強い意志と決意を新たにして、学習にスポーツに全力を集中するのだ。そしてその中から自分という健全な人間を一步一步築きあげていかなくはならない。

(飯田市川路中学校卒業 三十七年)